

# 運動選手の性格特性\*

—— 本学体育学部学生を対象にして ——

朴 澤 一 郎

松 井 匡 治

## I はじめに

運動選手あるいは運動クラブ経験者の性格特性およびパーソナリティに関する研究は、体育の心理学的研究の中でも、学習や指導方法、発達および運動能力などに関する研究と並んで、従来からしばしばとり上げられてきており、体育心理学の重要な研究領域となつている。\*

ところで、体育は広義の教育に連なるものであるならば、体育もまた教育目標に照らして、望ましい人格の育成をめざして営まなければならないことはいまでもない。従って諸種の学生スポーツ活動においても、望ましい人格の形成ということがまず重要な関心事となる。そこで、スポーツマン——ここでは、一流の運動選手ばかりでなく運動クラブ経験者を含めた広い意味で——の性格あるいはパーソナリティを論ずるさいに、このスポーツマンとして望ましい人格とは、一体何をめざして育成されなければならないのか、という点に関する考察からまず始める必要があると考える。従来のこの種の研究において、そもそもこの問題に関する共通理解に欠けていたのではないだろうか。

諸研究によると、スポーツマン特有の共通した性格特性——例えば、「明るくて神経質ではない」、「活動的で攻撃的」とか「社会的思想的に外向」というように——がみられるし、また他方では前者ほど顕著ではないが、各運動種目別または個人および団体種目間の相違もみられるようである。しかしながら、前述のような理由で、ただ単に現にあるスポーツマンの性格やパーソナリティ特性を把握するだけに止まらずに、スポーツマンとしての望ましい人格とは何か？——それはとりもなおさず教育目標がめざす方向に連なるものであろうが——という観点に立ち戻って、スポーツマンの性格およびパーソナリテ

ィの問題に取り組む必要があるのではないかと考える。

しかしかりに望ましい育成の方向が定まったとしても、方法論的にはこのことは必ずしも容易なことではない。従来の方法では、性格やパーソナリティを調べるのにその多くは、矢田部ギルフォード性格検査、MMPI、向性検査等の質問紙法形式のものとか、クレペリン精神作業検査、P・F・テストなどが一般に用いられている。これらは何れも、現にあるところの性格なりパーソナリティなりの特性や類型を把握する際に役立つであろうが、体育がそれらの形成に与える影響とか、体育による望ましい人格育成の方法を示唆するような満足すべき資料を必ずしも提供してくれていないのではなからうか？

そこでまず考えられるのは、縦断的なアプローチ (Longitudinal method) であろう。人格形成の出発点が幼少期にあるので、実験と観察に基づいた幼児に関する研究ならびに幼児に関する従来の研究成果をもっと多くとり入れる必要があるのではないかとと思われる。それとともに、従来しばしば行なわれてきたように、主として質問紙法や検査法に基づいた静的な特性および類型を把握するだけでなく、体育の実際場面における力動的・多面的なとらえ方も必要にならう。それ故、性格やパーソナリティの問題は、今後の研究にまつところが大きいといえる。

さて、われわれの本研究に触れてみよう。本学部は昨年度発足したばかりで、まだわれわれの手元には何んら指導に直接役立つような資料がないということと、もう一つは、学生の運動適性および職業適性に関する資料を累積しておきたいという二つの理由でもって、昨年発足以来、学生に対して若干の調査とか検査を続けてきている。本研究は、その一部の資料をまとめたものである。従って本研究のテーマに対する資料内容が十分整っていないが、ご批判を仰ぐ意味であえて経過を報告するわけ

\* 本研究の一部は、「本学体育専攻学生の性格特性」として、日本体育学会第18回大会 (1967年)ならびに第19回大会 (1968年)において発表。

\*\* このことについては、次の論文でも若干とり上げている。 Masaharu Matsui : *The Psychology of Physical Education in Japan*, The Tohoku Journal of Educational Psychology, Special Issue, 1968, pp. 29~37.

である。

## Ⅱ 目 的

本学体育学部学生の性格特性に関して、中学および高校時代に所属していた運動クラブ別・選手としての経験年数などに基づき類型化することによって、運動クラブ経験者の性格特性の問題に考察を加える。

## Ⅲ 方 法

### 1. 対 象

本学体育学部学生のうち、一年次67名（男子51名・女子16名）、二年次47名（男子43名・女子4名）、計114名。

なお、運動クラブ経験が通算して3年未満の者ならびに選手経験が2年未満の者はいずれも対象から除いてある。

### 2. 実施期間

昭和42年6月中および昭和43年6月上旬～7月上旬。

### 3. 調査・検査内容

- (1) 所属運動クラブに関する調査：中学および高校時代に所属していた運動クラブ、同所属年数、選手経験年数、役員経験年数および競技実績などに関する質問紙調査。

- (2) 矢田部ギルフォード性格検査：二年次学生に対しては、昨年度に続いて今年度も再検査を実施した。

- (3) 内田クレペリン精神作業検査：15分作業——5分休憩——10分作業、の方式で行なった。ただし、一部資料が欠けている。

## Ⅳ 結果と考察

### 1. 矢田部ギルフォード性格検査結果について\*

#### (1) 全般的な結果と考察

まず入学時のY—G尺度得点をみると、男子学生に関しては、第1表—1と第1図に示される通り、大学生一般と比較して本学生の場合、幾らか情緒的安定性の平均得点が低く、情緒的に安定している。社会的適応性の点では、大学生一般とほぼ同傾向を示す。それに対して、衝動性、内省性、主導性などに関する得点は、本学生の場合が全般的に高く、向性の面では、やや外向型であるといえる。従って男子学生の場合、全体として大学生一般より望ましい性格類型であるといえよう。

女子学生に関しては、第1表—2と第1図に示される通り、情緒安定性の得点は、大学生一般と殆んど同じ傾向であるが、社会的適応性の得点は比較的高く、主観的、非協調的、攻撃的である点で、幾分社会的に不適応であるといえる。向性の面では、全般にやや外向型であ

第1表—1 本学生（男子）と大学生一般（男子）のY—G尺度得点平均と標準偏差

尺 度		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
本 学 生 (94名)	M	10.65	9.31	7.72	8.75	8.65	8.09	11.05	12.09	11.42	9.65	10.64	12.64
	σ	5.36	4.08	4.58	4.59	3.84	3.62	3.63	3.84	4.43	3.78	4.39	4.11
大 学 生* (4136名)	M	11.23	9.98	8.97	9.72	8.11	8.34	10.87	10.85	9.96	8.16	8.52	10.23
	σ	5.51	4.99	5.52	5.35	4.38	4.06	4.25	5.16	4.85	4.62	5.53	5.48
本学生と大学生平均との差		-0.58	-0.67	-1.25	-0.97	0.54	-0.25	0.18	1.24	1.46	1.49	2.12	2.41

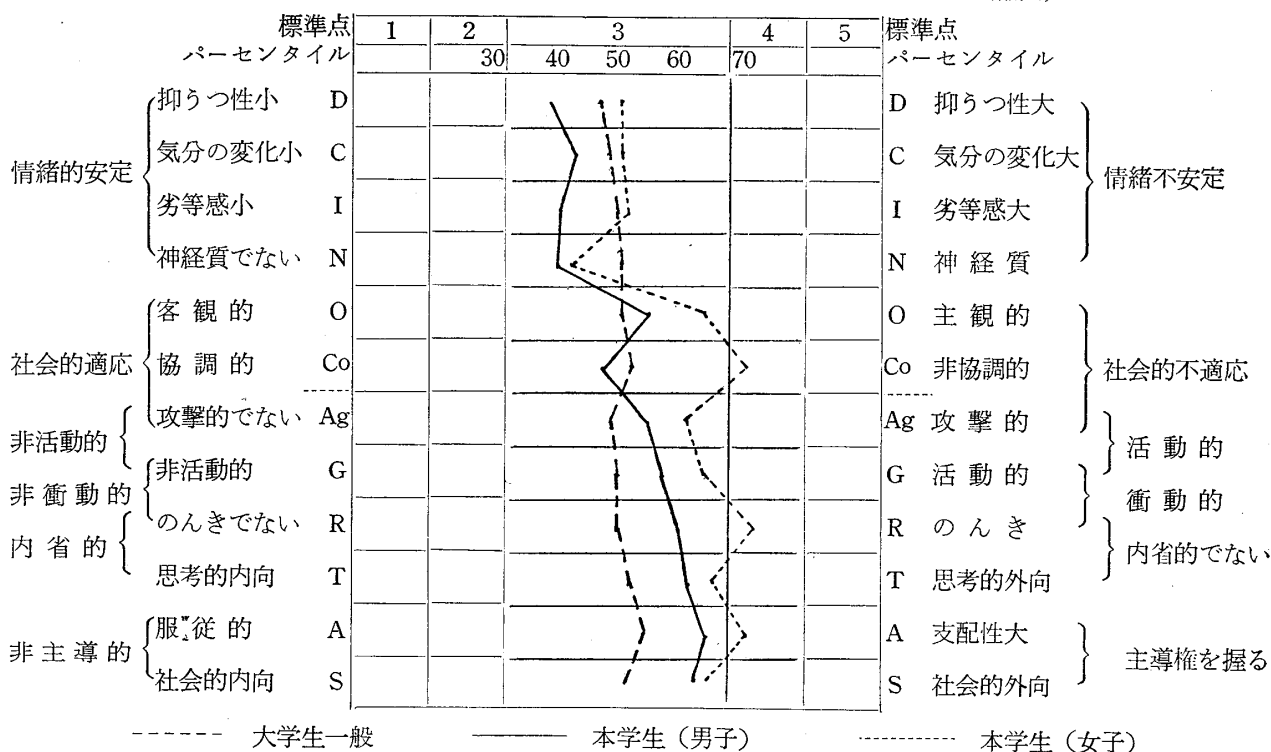
第1表—2 本学生（女子）と大学生一般（女子）のY—G尺度得点平均と標準偏差

尺 度		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
本 学 生 (20名)	M	12.60	10.30	9.20	8.60	9.80	8.80	11.35	13.15	12.45	9.60	11.30	12.00
	σ	4.27	4.25	2.76	3.69	3.07	3.02	3.92	3.36	4.41	4.05	3.50	4.11
大 学 生* (1974名)	M	11.73	10.33	9.00	9.76	8.36	6.88	10.45	10.70	9.10	8.08	8.42	10.40
	σ	5.25	4.97	5.38	4.86	4.06	3.81	4.20	5.11	4.67	4.53	5.29	5.28
本学生と大学生平均との差		0.87	-0.03	0.20	-1.16	1.44	1.92	0.90	2.45	3.35	1.52	2.88	1.60

\* 大学生一般の資料は、辻岡美延著：新性格検査法，竹井機器工業KK，262頁，第七表に基づく。

\* 以下、「Y—G検査」と略称する。

第 1 図 本学生と大学生一般の Y—G 検査プロフィール (縮図)



る。従って女子の場合、全体として大学生一般と比べて、積極型であるが社会的不適応性が高いといえよう。

これまで主として全体的な傾向を、Y—G尺度レベルにおいて考察してきたが、次に本学生の性格類型を調べてみよう。

はじめに、男子学生 (94名) について、第2表に基づいて考察しよう。そこで、A類 (平均型) とD類 (右下がり型; 安定適応積極型) が最も多く、それぞれ約30%を占めている。ついでB類 (右寄り型; 不安定不適応積極型)、C類 (左寄り型; 安定適応消極型) ならびにE類 (左下がり型; 不安定不適応消極型) の順に少なくなっている。

それに対して、女子学生 (20名) の場合 (第2表参照)、対象が少ないが、B類、A類、D類の順になって

いて、男子と比較してB類 (不安定不適応積極型) の占める比率が大である。ここでもやはり、男子と同様にC類やE類は少ない。

Y—G性格類型において、一般に、D類 (安定適応積極型) が最も望ましい類型と言われているが、本学生の場合、必ずしもこの型の占める比率は大きくなく、各種類型にわたっているといえる。しかし、D類と正反対の型であるE類——この型は、情緒的不安定、社会的不適応、非活動的、消極的、内向的性格で、性格の悪い面が内攻するタイプであるといわれる——とか、C類——この型は、情緒的安定、社会的適応、消極的内向性で、おとなしい、問題を起こしにくいタイプといわれる——などは、極めて少ないといえる。

ここで、二年次学生 (男子、43名) を対象に、Y—G

第 2 表 本学生の Y—G 判定類型別人数 (%)

類 型	A 類 (平均型)			B 類 (不安定不適 応積極型)			C 類 (安定適応消 極型)			D 類 (安定適応積 極型)			E 類 (不安定不適 応消極型)			F 型 (疑問型)	
	A型	A'	A''	B型	B'	AB	C型	C'	AC	D型	D'	AD	E型	E'	AE		
	人 数 (%)	男子	7	10	13	5	2	9	2	2	5	10	14	5	1		7
	女子	2	-	4	2	4	3	-	-	1	-	2	1	-	1	-	-
	計 (男子)	30(31.9)			16(17.0)			9(9.6)			29(30.9)			9(9.6)			1(1.0)
	計 (女子)	6(30.0)			9(45.0)			1(5.0)			3(15.0)			1(5.0)			0(0.0)

第 3 表 入学時と二年次の Y-G 尺度得点平均と標準偏差 (男子)

尺 度		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
入 学 時 (43名)	M	9.65	8.39	7.20	8.00	7.90	7.34	10.58	12.39	10.86	9.69	11.04	12.76
	σ	5.63	4.25	4.30	4.76	3.73	3.28	3.21	3.55	4.76	4.01	4.05	3.81
二 年 次 (43名)	M	11.65	10.62	8.44	10.13	9.18	9.11	12.11	11.97	11.60	9.51	10.88	12.79
	σ	6.35	4.78	4.30	5.18	4.29	3.94	3.39	4.01	5.01	4.56	5.00	4.73
入学時と二年次の平均の差		2.00	2.23	1.24	2.13	1.28	1.77	1.53	-0.42	0.74	-0.18	-0.16	0.03

第 4 表 Y-G 検査尺度の再検査信頼性 (二年次男子, N=43)

尺 度		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
本 学 生		.63	.61	.67	.62	.52	.56	.69	.55	.61	.29	.57	.73
Y - G 手 引*		.77	.72	.74	.78	.66	.58	.61	.82	.74	.56	.75	.67

\* 辻岡美延著：Y-G 性格検査実施手引，竹井機器工業 KK，15頁による。

尺度得点平均の年次別における変化を眺めてみよう。

その結果は第3表で明らか通り，入学時と比較して，全体的に情緒安定性および社会的適応性に関する得点が高まっている。従って入学時より僅かながら情緒的に不安定ならびに社会的に不適応に傾むいている。向性の面では殆んど変わらず，やや外向型といえる。

また，同一人に年次を追って行なった Y-G 検査尺度の間の再検査信頼性を調べてみよう (第4表を参照)。

Ag 尺度 (攻撃性) および S 尺度 (社会的向性) の二尺度を除いて，他は何れも Y-G 手引の結果よりは，信頼性係数がやや低く現われている。なかでも，T 尺度 (思考的向性) ——本尺度は Y-G 手引においても最も低い値を示すが——が極めて低い値であることが特に目立っている。

(2) 運動クラブ別の結果と考察

第5表によって，まず男子について考察しよう。

第 5 表 運動クラブ別 Y-G 尺度得点平均 (男子)

運 動 ク ラ ブ 人 数 尺 度	陸 上	野 球	バレー バスケット 等*	卓 球 庭 球 等**	柔 道 剣 道 等***	体 操	水 泳 ボート等****	そ の 他 *****	全 体
	24名	12	22	12	7	7	6	4	94
D	10.66	11.33	11.31	10.08	10.71	10.57	8.50	10.00	10.65
C	8.33	9.50	9.90	10.25	7.85	9.28	11.00	8.75	9.31
I	7.58	10.08	7.22	7.91	4.00	8.57	8.33	7.75	7.72
N	8.45	8.50	9.45	9.16	7.14	7.00	11.83	7.50	8.75
O	8.25	8.25	9.27	8.58	8.00	6.85	11.50	9.25	8.65
Co	7.66	9.16	7.95	9.58	7.42	6.28	8.00	8.00	8.09
Ag	10.45	10.00	10.86	10.50	13.85	11.28	13.50	11.25	11.05
G	11.62	10.25	11.72	13.33	13.00	12.14	15.33	12.25	12.09
R	9.16	12.41	12.31	13.00	11.42	9.85	13.66	11.75	11.42
T	8.08	10.75	10.95	9.66	9.14	9.14	10.00	10.00	9.65
A	10.50	8.66	10.13	11.91	10.85	10.85	13.16	12.00	10.64
S	12.75	11.75	11.59	13.50	13.28	12.42	15.16	13.50	12.64

\* バレー，バスケット，ハンドボール，サッカー，ラグビー等を含む。

\*\* 卓球，庭球，バドミントン等を含む。

\*\*\* 柔道，剣道，レスリング，フェンシング等を含む。

\*\*\*\* 水泳，ボート，スキー等を含む。

\*\*\*\*\* 主な所属クラブが二種目以上にわたるもの。

情緒安定性 (D・C・I・N尺度) について、情緒の安定順に列記すると、およそ次の通りになる。

柔道・剣道等→陸上→体操→バレー・バスケット等および卓球・庭球等→野球→水泳・ボート等

ここでは、柔道・剣道等のグループが全体の平均と較べて極めて安定していることと、水泳・ボート等のグループが逆にやや不安定なことがみられる。

次に社会的適応 (O・Co・Ag尺度) の順に列記するとおよそ、

体操→陸上→野球→バレー・バスケット等、卓球・庭球等および柔道・剣道等→水泳・ボート等

ここでは、全体の平均と比較して、体操クラブが良適応を示すこと、それに反して水泳・ボート等のグループが不適応傾向を示すこと、柔道・剣道等と水泳・ボート等のグループがやや攻撃的なこと、などがあげられよう。

向性 (G・R・T・A・S尺度) の面については、外向性の順に列記するとほぼ次のようになる。

水泳・ボート等→卓球・庭球等→バレー・バスケット等および柔道・剣道等→野球→体操→陸上

全体的にやや外向型であるが、なかでも水泳・ボート等および卓球・庭球等のグループは外向型である。陸上および体操クラブ等は両向型であるといえる。

上述の結果から、水泳・ボート等のグループにおいて、幾分B類 (不安定・不適応・積極型) の特性がみられ、柔道・剣道等のグループにおいて、D類 (安定・適応・積極型) の特性がみられるが、その他のクラブに関しては、概してA類に含まれるが、本資料からは一義的

な傾向が得られない。

なお、女子に関する尺度レベルでの考察は、対象が少ないので、別の機会にゆずる。

次に、第6表に基づき、運動クラブ別Y-G判定類型について考察する。

まず男子学生についてとり上げよう。陸上クラブでは各類型に分散している。このような傾向が生じたのは、主として陸上クラブに所属していた者のうち、70%強が多少とも他の運動クラブ経験者であるということがその一因として考えられる。野球の場合、その半数がA類 (平均型) であることが目立つ。バレー・バスケット等、卓球・庭球等の球技の場合でも、やはりA類が最も多くを占めるが、D類 (安定適応積極型) がそれに次ぎ、B類 (不安定不適応積極型) も比較的多い。これらの場合、積極外向型が半数以上を占めている点特徴的であろう。柔道・剣道等の場合は全て安定適応型といえる。体操クラブでも、前者と同様にD類が多い。その他のクラブでは特に明確な傾向が得られない。

他方、女子の場合では、男子と同様にA類 (平均型) も多いが、B類およびD類のような積極型が半数以上みられることが特徴的である。また男子と較べて、主観的、非協調的な点が目立っている。なお、クラブ別の考察は別の機会にとり上げる。

## 2. クレペリン検査結果とY-G検査結果との関係について

クレペリン精神作業検査による判定類型と、Y-G検

第6表 運動クラブ別Y-G判定類型

( ) 内は女子, N=114

運動クラブ	人数	A 類	B 類	C 類	D 類	E 類	F 型
陸上	24(7)	5(2)	4(3)	3	7(1)	4(1)	1
野球	12	6	2	1	2	1	
バレー・バスケット等	22(6)	8(2)	5(2)	2(1)	6(1)	1	
卓球・庭球等	12(2)	5	2(1)		4(1)	1	
柔道・剣道等	7	1		2	4		
体操*	7(5)	(2)	1(3)	1	4	1	
水泳・ボート等	6	3	2		1		
その他	4	2			1	1	
全体	94(20)	30(6)	16(9)	9(1)	29(3)	9(1)	1(0)

\* 女子の場合は「ダンス」を含む。

第 7 表 Y—G判定類型とクレペリン判定類型との関連性

( ) 内は女子, N=96

Y—G判定 類型	A 類	B 類	C 類	D 類	E 類	計 (名)
優または良*	14 (4)	11 (4)	3 (1)	18 (2)	6 (2)	52(13)
可 **	1	1 (2)	0	5 (1)	1	8 (3)
異常***	6	5 (1)	2	1 (1)	4	18 (2)
計 (名)	21 (4)	17 (7)	5 (1)	24 (4)	11 (2)	78(18)

注) クレペリン判定類型で, 不可 (c', d, d', d'', dF, dP型) の該当者はいない。

\* クレペリン判定類型で, au, au', au'', a, a', a'', b などの型の者。

\*\* クレペリン判定類型で, b', b'', c, c'などの型の者。

\*\*\* クレペリン判定類型で, auF, auP, aF, aP, bF, bP, cF, cPなどの型の者。

査の判定類型との間に, どのような関連性があるだろうか (第 7 表を参照)。

男子について両者の判定類型を比較してみると, クレペリン検査で良好な作業曲線とみなされている「優」または「良」の評価段階に位置する者が, Y—G検査においてはどのような性格類型の持ち主であろうか。ここでもやはり, Y—G性格類型のうちで最も望ましいタイプとされているD類に属する者が, クレペリン検査でも最も大きい比率 (75.0%) で「優」または「良」の段階を占めている。ついで, A類 (66.6%), B類 (64.7%), C類 (60.0%), E類 (54.5%) の順で少なくなるが, D類以外の類型においては, その比率に顕著な差がみられない。

それに対して, クレペリン検査で「異常」の評価を得ている者のY—G類型をみると, 前者の場合とは逆に, C類 (40.0%) およびE類 (36.3%) が最も多くを占めていて, B類 (29.4%) とA類 (28.5%) がこれにつき, D類は僅かに 4.1% を占めているにすぎない。従って, クレペリン検査においても, 一般にD類が優秀な成績を示すといえる。しかし, その他の類型では, クレペリン検査とY—G検査との間に積極的な関連が見出せないといえよう。

なお, 女子に関しては今回は資料を提示するにとどめておく。

## V まとめ

### 1. 矢田部ギルフォード性格検査結果について

#### (1) 全般的な傾向について

はじめに, Y—G尺度レベルで考察すると, 男子学生では, 大学生一般 (辻岡美延著「新性格検査法」の中の

資料) と較べて本学生の場合, 幾らか情緒的に安定し, 社会的適応性はほぼ同じ傾向だが, 向性はやや外向型を示す。従って大学生一般より望ましい性格類型であるといえる。(第 1 表—1 および第 1 図参照)。

女子学生では, 情緒安定性は大学生一般とほぼ同じ傾向を示すが, 主観的, 非協調的, 攻撃的な点で幾分社会的には不適応で, 向性はやや外向型である。そこで女子の場合, 積極型だが社会的不適応性が高いといえる。(第 1 表—2 および第 1 図参照)。

次に性格類型をみてみると, 男子の場合, A類 (平均型) とD類 (右下がり型; 安定適応積極型) とがそれぞれ約30%を占めていて最も多く, C類 (左寄り型; 安定適応消極型) とE類 (左下がり型; 不安定不適応消極型) など消極型は少ない。女子の場合, B類 (右寄り型; 不安定不適応積極型) とA類 (平均型) が多く, C類やE類は少ない。(第 2 表参照)。

なお, 二次数学生 (男子) に関して, 入学時と第二年度目のY—G尺度得点平均およびその再検査信頼性を調べてみると, 入学時と較べてやや情緒的に不安定, 社会的不適応の傾向がみられるが, 向性は殆んど変化しない。信頼性係数では, T尺度 (思考的向性) が特に低い値 (・29) を示している。(第 3 表および第 4 表参照)。

#### (2) 運動クラブ別の傾向について

男子についてのみ考察すると, 水泳・ボート等のクラブにおいてややB類の特性がみられ, 柔道・剣道等においてD類的特性がみられるが, その他のクラブでは, 概してA類に含まれるものの, 一義的な傾向が得られない。(第 5 表および第 6 表参照)。

\* クレペリン検査成績の判定は, 次の文献による。

横田象一郎著: クレペリン精神作業検査解説, 金子書房刊, 昭和42年版。

## 2. クレペリン精神作業検査とY—G検査との関連性について

一般に最も望ましい性格類型といわれているD類（安定適応積極型）の者が、クレペリン精神作業検査においても、優良な曲線である「優」または「良」の評価を最も多く得ている（75.0%）。しかしその他の性格類型にはほぼ同比率（50%～60%台）の優または良段階の者が含まれていて、類型間に顕著な差が見出せない。（第7表参照）。

〈追記〉 本調査ならびに検査を実施するにあたりご協力くださった本学体育学研究室鈴木文夫教授、健康教育学研究室佐久間充講師、その他の方々に対して心からお礼申し上げます。

## 参考文献

1. 野口義之他：運動選手の性格特性についての研究，体育学研究，Vol.2, No.5, 1957, 227—233。
2. 小林 篤：スポーツ種目の好みとパーソナリティ特性についての研究，体育学研究，Vol.5, No.4, 1961, 116—123。
3. 畑田 登他：各種スポーツによつて発達する体型と性格に関する研究（第一報），体育学研究，Vol.7, No.3, 1963, 71—81。
4. Takaaki NIWA：Factorial Study of Personality Traits in the Intercollegiate Athletes, Research Journal of Physical Education, Vol.7, No.4, 1964, 21—37。
5. 花田敬一・藤善尚憲・河瀬雅夫：身体運動によつて影響される性格特性の追跡的研究，体育学研究，Vol.9, No.4—5, 83—90。
6. 鎌田英爾：工学院大学新生のYatabe—Guilford 性格検査法による性格，工学院大学研究論叢，6, 1967, 83—101。
7. Masaharu MATSUI：The Psychology of Physical Education in Japan, The Tohoku Journal of Educational Psychology, Special Issue, 1968, 29—37。
8. 辻岡美延：新性格検査法，昭和42，竹井機器工業K.K.
9. 横田象一郎：クレペリン精神作業検査解説，昭和42，金子書房。  
(1968. 9. 30日)